

「リゴレット」 - MET ライブビューイングから

藤原 道夫

ニューヨークのメトロポリタン歌劇場 (MET) の公演は、コロナ禍の影響を受けて1年半にわたって中止を余儀なくされた。2021年10月からシーズン公演が再開され、ライブビューイング (ライブ) の配信も始まった。3月下旬の日曜日にライブ3演目目の「リゴレット」 (ヴェルディ作曲) を上映する映画館に出かけた。予約なしで早めに行ったところ、席はいくばくも埋まっておらず、ゆったりと鑑賞することができた。

MET ライブの良さは、映像の美しさや音の迫力はもとより、合間に歌手や演出家などへのインタビューが入り、的確な質問と回答とがオペラの鑑賞に役立つこと。今回の「リゴレット」の舞台背景は1920年頃のワイマールを想定し、第一次世界大戦で敗北したドイツの社会情勢を取り入れたようだ。その時代の先端的な建築様式を模して舞台が作られ、歌手はその時代の服装で歌う。馴染めなかったのがリゴレットの存在そのもの、本来宮廷の道化者で服装もそれと分かるのだが、化粧はしていても黒っぽい服装は道化者というより何やら怪しげな黒幕のよう。舞台全体が暗かったのは、裏の世界を描き出したかったせいかな。

歌手陣は、知らない人ばかりだが、MET だけあってすばらしい歌唱力を発揮していた。だが、私はどうしても馴染んできた一枚のLD (1982年版) を思い出してしまう。このLDはポネルが演出し、マントヴァの市を舞台とした映像として編集されている。最後の場面、湖の上から市内の城や教会の塔などが見渡せる風景は、まさしくマントヴァだ。しかし、途中をよくみるとフェッラーラのエステンセ城が映し出されるし、娘ジルダが誘拐されたと知って狂ったように走るリゴレットの背景はパルマの洗礼堂だ。それらはさておき、マントヴァ公爵役のパヴァロッティの歌唱がすばらしい。女心の歌 (La donna e mobile, qual piuma al vento...) は絶品といえる。特に悲劇の核心部への導入となるところで歌われる二度目の歌は、オペラ全体に何ともいえない明るさ・軽さをもたらしている。ジルダ役のグルベローヴァもリゴレット役のヴィクセルも役柄を巧みに演技しながら歌っている。今回のMETライブでは、公爵もジルダも生真面目に歌い過ぎていたように思う。

医師の資格をもつ演出家J. ミラーによると、よい演出によるオペラの舞台は記憶として刷り込まれ、それを後からみるものと無意識のうちに比較することになるという。今回みたMETライブの「リゴレット」の場合がまさにそうだった。

METの観客が皆マスクを付けている映像も印象に残った。さまざまな感想を抱きながらも、コロナ禍が収束していない状況下でMETライブの配信が再開されたことを嬉しく思う。